

仏説観普賢菩薩行法經 ぶっせつかんふげんぼさつぎょうぼうきょう

このお経は、《妙法蓮華經》の最後の《普賢菩薩勸発品第二十八》のあとを受けて、さらに普賢菩薩を主役として説かれたもので、徹底した懺悔の法をお説きになっているために、一名《懺悔經》と呼ばれています。

普賢菩薩を觀ずる

題名の〈普賢菩薩を觀ずる行法〉というのは、普賢菩薩の〈行〉の徳をしっかりとみつめることによって、その精神に自分の心が一致するようになり、心が仏道に定まり、ついに普賢菩薩とおなじような〈行〉ができるようになる、そのような修行の方法……という意味です。

この品には〈普賢菩薩の身を見る〉ということがくりかえしくりかえし説かれています。それはつまり、自分の心が普賢菩薩の精神にピタリと一致するというところにほかなりません。まだそのような境地にたっていないならば、修行のいたらなさを反省・懺悔する必要があるということです。

また、〈普賢菩薩の身を見る〉ことができて、それで満足せず、こんどは〈仏身を見る〉ように努力しなければならぬことが説かれています。仏さまのみ心と一致することができてこそ、修行の完成があるからです。

懺悔の極致は実相をおもうこと

それゆえに、〈懺悔の極致は諸法実相を思うことである〉と説かれています。諸法実相というのは第一義空ということです。六情根を懺悔したうえで、このことを一心に思惟し、徹底することができれば、すなわち仏さまのみ心と一致することができたわけで、もろもろの罪はあたかも霜露のごとく、その大智慧の光によって消滅すると説かれているのです。

在家信者の懺悔の実践

最後に仏さまは在家のもの、特に心ある人びとに、現実的な懺悔の実践を教えてくださいました。

- 一、三宝を敬い、出家僧などの信仰修行の邪魔をせず、六念の法（仏・法・僧・戒・施・天）を修し、大乘の教えを保つひとをたいせつにし、いつも〈第一義空（諸法実相）〉ということに、心をとどめていなさい。
- 二、父母に孝養をつくし、先生や、自上のひとを尊敬しなさい。
- 三、正法にもとづいて国を治め、まちがった考えによって、人民を邪道へ曲らせないようにしなさい（政治家として調和のとれた正しい政治を行なうこと。あるいは、組織などのリーダーとして正しく人びとを導くこと）。
- 四、月の六度の精進日には、自分の治めている土地（影響力の及ぶ処）に布告をだし、支配力（影響力）の及ぶかぎりの処で、あらゆるものの生命を尊重するように呼びかけなさい。
- 五、因果の道理を深く信じ、仏に至る菩薩道を信じ、久遠本仏はつねに自分とともにいてくださり、決して滅しられることのないことを知りなさい。

仏教の総まとめ

以上の五つの懺悔の実践は、民主主義の現代においては、われわれ一人ひとりが実践すべき大切な項目であります。特に五つ目の、〈但當に深く因果を信じ、一実の道を信じ、仏は滅したまわずと知るべし〉とのおことば、これこそ、仏教全体を総まとめした、じつに尊いご指導といわなければなりません。

〈因果〉とは原因・結果の法則であり、〈因縁の法門〉とも〈縁起の法〉ともいい、仏教の骨格をなす教えです。

〈一実の道〉とは、だだひとつの眞実の道、仏になる道、菩薩道のことです。したがって仏の教えにはさまざまながいがあるようでも、すべてが、あらゆる衆生を〈仏の境地にみちびく〉というただ一つの眞実につらぬかれているということです。これが〈一実の道〉です。

〈仏は滅したまわずと知る〉とは、いうまでもなく、久遠実成の本仏は不生不滅であり、われわれはその久遠本仏に生かされているのだという眞実を知ることです。

この三つの信が心のなかに確立すれば、いかなる人もほんとうに自由自在の心境にたつすることができます。それこそが、ほんとうの救いなのであります。まことにこれは、法華三部經の掉尾を飾るにふさわしい大金言なのであります。